

【生薬名】 山梔子 *GARDENIAE FRUCTUS*

【起源植物】 クチナシ *gardenia jasminoides grandiflora*

コリンクチナシ *gardenia jasminoides*



水梔子(左)と山梔子(右)

【科名】 アカネ科 *Rubiaceae*

【別名】 枝子・梔子・木丹(神農本草経)、越桃(別録)

【薬用部分】 果実

【主成分】 イリドイド配糖体、カロチノイド

【薬性】 気味は苦寒、帰経は心肝肺胃に属す

【効能】 ●清熱瀉火・涼血解毒

●消炎、止血。利胆。解熱、鎮静薬として、充血・炎症による心煩を主治し、吐血、血尿、充血、黄疸などに応用する。

●5~8gを煎服、黄疸、吐血、不眠、腰痛、茸中毒、肝胆の疾患等に

●内服する際に量が多いと下痢することがある

●腫れ物、打撲、腰痛には5~6個分の粉末を水で練って湿布する、同量の黄柏末を加えたり、酢で練ると更に効果的

●安全な食品添加物(天然着色料)としての需要が高まっています

●炒って炭化した山梔子炭には止血作用がある

●山梔子は能く肺火を瀉し・熱を泄し。煩を除く。外感熱病(温病)で表・裏に熱のある際によく両方に作用し解熱する。その効用は黄連や黄芩に似ているが、黄連、黄芩は能く湿を燥し、熱を清するが、山梔子は能く虚煩を療する。張仲景の「梔子豉湯」は汗吐下後虚煩して眠りえぬ場合に用い、「大黃黄連瀉心湯」の苦寒泄降の作用とは異なっている。また涼血、止血、熱毒を清する作用があり、吐血、鼻血、尿血、目赤腫痛、瘡瘍にも用いる。また皮膚表面の熱を去り、古今黄疸を治するに黄柏、茵陳蒿と共に用いる。

【出典】 ●治五内邪氣。胃中熱氣。面赤酒皰皴鼻。白癩赤癩瘡瘍。(本経中品)

●主治心煩也。旁治発黄。(薬徴)

【備考】 ●長手のものを水梔子という

【処方例】 ●黄連解毒湯、梔子豉湯、加味逍遥散、梔子薬皮湯